

佐波古温泉

一村立のぼれるこそ、これなん温泉の出る所ならめと、いとうれしくて、とりく道いそぐま、に、ほどなく行つきぬ、以實、
かりぬべきやどりやそれと夕烟一むら見ゆる山もとのさと、
〔類聚名物考 地理三十五〕佐波古の御湯、さはこのみゆ

〔東遊雜記 二十五〕平より南一里、湯本の町、大概の所なり、此地には温泉數多にて、家々に湯壺有り、入湯せる人も多く、濕瘡毒に功有る湯也、當國名所記に、大納言師氏、

夜と、もになげかしき身を陸奥の三箱サハの御湯といはせてしがな、
此名の事なるや、未詳といへども、外に名づくべき温泉の所なし、

〔拾遺和歌集七物名〕さはこのみゆ

よみ人まらす

あかずしてわかる、人のすむ里はさはこのみゆる山のあなたか

〔夫木和歌抄二十六〕

大納言師氏卿

よと、もになげかじきみをみちのくのさはこのみゆといはせてしがな

玉造温泉

〔類聚名物考 地理三十五〕今案に、玉造湯抄にも地未考と有、おもふに玉造郷は、陸奥國にあり、玉造

河は播磨國に有り、そのほとりのことにや、未詳、

〔續日本後紀六仁明〕承和四年四月戊申、陸奥國言、玉造塞温泉、石神雷響、振晝夜不止、温泉流河、其色如

漿、加以山燒谷塞、石崩折木、更作新沼、沸聲如雷、如此奇怪、不可勝計、仍仰國司、鎮謝災異、教誘夷狄、

釜崎温泉

〔奥羽觀蹟聞老志四名蹟〕釜崎温泉

在八宮以西、寛取之山間、能治諸證、是以佗方久病廢疾者、不遠千里而輻輳、待驗而歸者亦多、封内之

名湯也、湯舍上有善遊堂、

青根温泉

〔奥羽觀蹟聞老志四名蹟〕青根温泉 東北有古温泉、曰女御湯、